

第2節 ● 臓 象

臓象概説

臓とは体内におさまっている内臓のことであり、象とは外に現れる生理、病理現象のことである。臓象学説とは、人体の生理・病理現象の観察を通じて、各臓腑の生理機能や病理変化、さらにその相互関係を解き明かす理論のことである。

ここでいう臓腑とは内臓の総称である。これらはそれぞれのもつ生理的機能的特徴により、臓・腑・奇恒の腑の3つに分類することができる。臓は五臓のことであり、これには心・肺・脾・肝・腎がある。腑は六腑のことであり、これには胆・胃・小腸・大腸・膀胱・三焦がある。また奇恒の腑には、脳・髄・骨・脈・胆・女子胞がある。

1 臓・腑・奇恒の腑のそれぞれの生理的特徴

- ①五臓に共通する生理的特徴……精気の化生と貯蔵^①
- ②六腑に共通する生理的特徴……水穀の受盛と伝化^②
- ③奇恒の腑……奇恒の腑の形態および生理機能は、六腑とは異なっている。奇恒の腑は水穀と直接に接触することはなく、密閉した組織器官であると考えられている。また精気を蔵するという臓の作用に類似した機能ももっている。こうした生理的特徴により、六腑とは区別されて奇恒の腑と称されている^③。

病気の初期の段階では、病は腑にあることが多く、長期化すると臓に移行するケースが多い。また臓の病には虚証のものが多く、腑の病には実証のものが多くという特徴がある。腑実証の場合には該当する腑を瀉し、臓虚の場合には該当する臓を補えばよい。

2 臓象学説の形成

臓象学説の形成にあたっては、古代における解剖知識、生理・病理現象の観察および医療実践の3大要素が大きな影響をおよぼした。

1. 古代の解剖知識

例えば、『靈樞』経水篇には、屍体を解剖して臓腑の大小、脈の長短、血の清濁などを観察したという記載がある^④。解剖の経験が臓象学説にとって形態学上の基礎となったと考えられている。

2. 長期にわたる人体の生理・病理現象の観察

例えば、皮膚が寒冷刺激を受けて感冒を患った場合には、鼻づまり・鼻水・咳嗽などの

症状が現れる。このようなことから皮毛・鼻・肺のあいだに密接な関係があることが認識されるようになった。こうした各器官の相互関連が追求されることにより、臓象学説が導き出されたのである。

3. 医療実践

多くの医療実践を通じて、病理現象とそれに対する治療の効果が経験として蓄積され、それが分析されていくなかで、人体の多くの生理機能が認識されてきた。例えば、多くの眼疾患に対し、肝を病位として治療すると良い効果が得られ、これが繰り返し検証されて、「肝は目に開竅する」という考えがもたれるようになったのである。また、補腎により、骨の癒合が促進される。このことから腎の精気に骨格を生長させる作用があることが知られるようになり、「腎は骨を主る」という認識が生まれたのである。

3 臓腑の統一観

五臓を中心とする臓腑の統一観が、臓象学説の主な特徴となっている。その統一観の基礎をなすのは、主として次の2点である。

- ①臓と腑は1つの統一体である。
- ②五臓と身体の所定の部位、それぞれの竅とはたがいに連絡しあっており、1つの統一体を形成している。

臓は陰の性質を、腑は陽の性質をもっているが、臓腑のあいだには表裏関係がある。心と小腸、肺と大腸、脾と胃、肝と胆、腎と膀胱および心包と三焦はそれぞれたがいに表裏関係となっている。

また五臓にはそれぞれ外候〔外への現れ〕があり、身体の所定の部位や諸竅〔穴〕とのあいだには特定の関係がある。ここではその概略を紹介し、詳細については各臓腑の紹介のところで述べることにする。

- 心：その華は顔にあり、血脈を充たし、舌に開竅する。
 肺：その華は毛にあり、皮毛を充たし、鼻に開竅する。
 脾：その華は唇にあり、肌を充たし、口に開竅する。
 肝：その華は爪にあり、筋を充たし、目に開竅する。
 腎：その華は髪にあり、骨を充たし、耳と二陰に開竅する。

4 精神・情緒と五臓との関係

意識・思惟・精神・情緒は脳の機能であるが、これについては『内経』などの文献にもその記載がある。臓象学説では、意識・思惟・精神・情緒などは、五臓の生理活動と密接な関係があると考えている。例えば、心は神に、肺は魄に、肝は魂に、脾は意に、腎は志にそれぞれ対応しているとされている^④。

五臓の生理機能が正常であってこそ、脳の機能も正常に機能する。五臓の機能に異常が生じると、脳の意識、思惟や精神、情緒方面における機能に影響をあたえる。また逆に精神や意識面での変化が、五臓の生理機能に影響することもある。

5 五臓を中心とする身体の生理機能の平衡と協調

五臓それぞれの生理機能のあいだには、一定の平衡、協調関係があり、そうした協調関係は体内の内部環境を相対的に安定させるために、重要な役割をはたしている。この関係は五行説にもとづいて整理されている。また五臓と身体の一部・諸竅との連絡、あるいは五臓と精神・情緒活動との関係を通じて、体内と体外とは連絡しあっており、これにより体内環境と体外環境とは、相対的なバランス、協調を維持している。

6 臓象学説における臓腑の位置づけ

臓象学説の形成にあたっては、古代の解剖知識がその基礎となっているが、この学説の発展過程には「体内の状態は、必ず体外に反映する」という考えにもとづく観察、研究の蓄積があった。したがってその内容は、人体解剖学の臓腑の範囲をはるかに超越しており、独特な生理・病理の理論体系を形成している。

心・肺・脾・肝・腎などの臓腑の名称は、現代解剖学の臓器の名称と同じであるが、生理・病理上の内容は、必ずしも同じというわけではない。確かに中医学における1つの臓腑の生理機能は、現代解剖生理学のいくつかの臓器の生理機能を含んでいると考えられる。また現代医学の認識する1つの臓器の生理機能は、臓象学説ではいくつかの臓腑の生理機能のなかに分散している。しかし臓象学説中の臓腑を、強いて現代解剖学的概念に対応させる必要はない。より重要なのは、臓象学説中の臓腑が系統性をもった生理・病理の概念を包括していることにある。

【出典】

- ①『素問』五藏別論篇：「所謂五藏者，藏精氣而不瀉也，故滿而不能實。六府者，伝化物而不藏，故実而不能満也。」
- ②『素問』五藏別論篇：「脳、髓、骨、脈、胆、女子胞、此六者、地氣之所生也、皆藏於陰而象於地、故藏而不瀉、名曰奇恒之府。」
- ③『靈樞』経水篇：「若夫八尺之士、皮肉在此、外可度量切循而得之、其死可解剖而視之、其藏之堅脆、府之大小、穀之多少、脈之長短、血之清濁……皆有大数。」
- ④『素問』宣明五氣篇：「心藏神、肺藏魄、肝藏魂、脾藏意、腎藏志。」

五臓

心・肺・脾・肝・腎を総称して五臓という。五臓間の各種の生理機能は、相互依存・相互制約の関係により、協調しあいバランスを保っている。これらは陰陽五行学説の理論を用いて説明することができる。以下で各臓腑の特徴について紹介する。

① 心

心の概略	主な生理機能	血脈を主る 神志を主る
	五行との照応関係	五志：喜 五液：汗 五主：脈 五華：顔面 表裏：小腸 五竅：舌

1 心の主な生理機能

【1】血脈を主る

血脈は、血液が運行する通路である。「心は血脈を主る」とは、血液を推動して脈中に運行させ、身体各部を滋養するという心の機能を説明したものである^{②③④}。

血脈を主るという心の機能は、心気的作用により行われている。心気が旺盛であれば、血液はたえまなく脈管中を運行し、血中の栄養物質は臓腑・組織器官および四肢百骸にうまく輸送される。逆に、心気が不足したために血液の推動が弱くなると、顔色がすぐれなかつたり^⑤、脈が細弱となる。またこのために血行に障害が生じると、顔や唇が青紫〔チアノーゼ状〕になり、脈が細瀦しよくとなることもある。

これらの考えのもとづくと、吐血・衄血じくけつ・胸痺・心悸などの心・血・脈系統の疾患に対しては、心を病位として治療すればよいことがわかる。

【2】神志を主る

「心は神志を主る」といわれているが、また「心は神を蔵す」とか、「心は神明を主る」

ともいわれる。これは心に精神・意識・思惟活動を主宰する機能があることを説明したものである。「神」には次のような広義と狭義の二通りの意味がある。

広義の「神」とは、人体の生命活動の外的な現れを指している。例えば、人体の形象および顔色・眼光・言語の応答・身体の動きの状態などは、すべてこの広義の「神」の範囲にはいる。また狭義の「神」とは、精神・意識・思惟活動を指している^{⑥⑦}。

心の機能が正常であれば、精神は充実し、意識や思惟もしっかりしている。精神や意識・思惟活動の異常は、心の機能失調と考えられるが、この場合、不眠・多夢・気持ちが落ち着かないなどの状態になり、うわごとをいったり、狂躁の状態になることもある。あるいは反応が鈍くなったり、健忘・精神萎靡いびとなったり、昏睡・人事不省になることもある。

さらにいえば「心は神志を主る」という機能と、「心は血脈を主る」という機能を分けて考えることはできない。血液は神志活動を担う基礎物質であり、心に血脈を主るという機能があるからこそ、心は神志を主ることができるのである^{⑧⑨}。心の「血脈を主る」という機能に異常が生じると、神志面での変化がおりやすい。したがって臨床上、ある種の神志異常に対しては、血分の側面から治療することが多い。

2 心と五行の照応関係

【1】喜は心の志^⑩

「喜は心の志」とは、心の生理機能と精神情緒の「喜」との関係をいったものである。臓象学説では、喜・怒・憂・思・恐を五志と称しており、これらはそれぞれ特定の臓と関係が深い。五志は、外界の事物事象から受ける印象よりおこる情緒の変化であるが、中医学では情緒の変化は五臓の生理機能により生じると考えられている^⑪。

一般的にいうと、「喜」は人体に対して良性的刺激を与える情緒であり、心の「血脈を主る」などの生理機能に対してプラスに作用する^⑫。しかしこれが過度になると、かえって心神を損傷することがある^⑬。

【2】汗は心の液

津液が陽気的作用を受けて玄府〔汗孔〕から流れ出たとき、その液体は汗となる^⑭。汗の排泄は、また衛気の腠理を開閉する機能とも関係がある。例えば、腠理が開くと汗は排泄され、腠理が閉じていると無汗となる。汗は津液から化生したものであり、血と津液とは源を同じくしている。発汗は心の機能を反映することがあるため「汗は心の液」といわれているのである。心気虚となると自汗がおり、心陽虚となると汗がしたたると出る。したがって臨床上、汗の異常を治療するときには、心の機能を調節することが多い。

【3】体は脈に合し、華は顔にある

脈とは血脈のことである。心は「脈に合す」とは、全身の血脈の機能が心に帰属していることをいったものである。華とは色彩、光沢のことであり、「華は顔にある」とは、心の生理機能の状態が、顔面部の色彩、光沢の変化から判ることを説明している。頭顔面部

には血脈が集中しており^⑨、心気が旺盛であれば、血脈が充足するため、顔面部の血色はよい。逆に、心気が不足すると顔色は晄白^{こうはく}となり、血虚の場合は顔色が青白く艶がなくなる。また血瘀^{けつお}の場合には、顔色は青紫色になることが多い^⑩。

【4】舌に開竅する^{かいきやう}

舌は心の状態を反映するため、「心は舌に開竅する」といわれている。また舌は「心の苗^{なえ}」であるともいわれている。舌には味覚の識別と言語を発するという二種の機能があるが^⑪、これらの舌の機能は、心の「血脈を主る」機能と、「神志を主る」機能と関係がある。したがって心の生理機能に異常が生じると、味覚の変化^{ぜつぎやう}や舌強〔舌のこわばり、言語障害〕などが現れやすい^⑫。

一方、舌質の色彩、光沢からは気血の運行状況と、心の「血脈を主る」という生理機能の状況を知ることができる。この「心は舌に開竅する」という考えは、古代の医家が長期にわたる生理・病理現象の観察を通じて得た理論である^⑬。以下に心の病理変化と舌との関係をいくつか紹介しておく。

- ①心の陽気不足……………舌質淡白・胖・嫩^{はん どん}
- ②心の陰血不足……………舌質紅絳・瘦・瘰^{ひつ}
- ③心火上炎……………舌質紅、あるいは瘡ができる
- ④心血瘀阻……………舌質暗紫、あるいは瘀斑がある
- ⑤神志を主る機能の異常……舌卷・舌強・言語障害・失語など

心と六腑との関係は、臟腑関係の章で述べることにする。

付——— 心包^{しんぼう}

心包は、心包絡あるいは膻中^{だんちゆう}ともいわれている。これは心臓の外面を包んでいる膜であり、心臓を保護する作用がある。心は心包絡のなかにあり、膻中は心の外にあるので、『内経』では、これを「心の宮城」と称している^⑭。経絡学説によると、手厥陰経は心包絡に属しており、手少陽三焦経と表裏の関係にある。臓象学説では、心包絡は心の外圍にあたり、心臓を保護する作用があると考えており、したがって外邪が心に侵入する場合には、まず心包絡が病むことになる^⑮。温病学説では、外感熱病に現れる昏睡^{せんご}や譫語などの症状を、「熱入心包」や「蒙蔽心包」などによるものとしている。

【出典】

- ①『素問』六節臟象論篇：「心者、生之本、神之主也。其華在面，其充在血脈。」
- ②『素問』五藏生成篇：「諸血者，皆屬於心。」
- ③『素問』痿論篇：「心主身之血脈。」
- ④『素問』六節臟象論篇：「心者……其充在血脈。」
- ⑤『靈樞』決氣篇：「血脫者，色白，天然不沢。」
- ⑥『素問』靈蘭秘典論篇：「心者，君主之官，神明出焉。」
- ⑦『靈樞』邪客篇：「心者，五藏六府之大主也，精神之所舍也。」
- ⑧『靈樞』本神篇：「心藏脈，脈舍神。」

- ⑨『靈樞』營衛生會篇：「血者，神氣也。」
- ⑩『素問』陰陽應象大論篇：「在藏為心……在志為喜。」
- ⑪『素問』天元紀大論篇：「人有五藏化五氣，以生喜，怒，思，憂，恐。」
- ⑫『素問』拳痛論篇：「喜則氣和志達，營衛通利。」
- ⑬『靈樞』本神篇：「喜樂者，神憚散而不藏。」
- ⑭『素問』陰陽別論篇：「陽加於陰謂之汗。」
- ⑮『靈樞』邪氣藏府病形篇：「十二經脈，三百六十五絡，其血氣皆上於面而走空竅。」
- ⑯『素問』五藏生成篇：「心之合脈也，其榮色也。」
- ⑰『靈樞』憂恚無言篇：「舌者，音聲之機也。」
- ⑱『靈樞』脈度篇：「心氣通於舌，心和則舌能知五味矣。」
- ⑲『靈樞』經脈篇：「手少陰之別……循經入心中，系舌本。」
- ⑳『素問』陰陽應象大論篇：「心主舌」「在竅為舌。」
- ㉑『靈樞』脹論篇：「膻中者，心之宮城也。」
- ㉒『靈樞』邪客篇：「心者，五藏六府之大主，精神之所舍也，其藏堅固，邪弗能容也。容之則心傷，心傷則神去，神去則死矣。故諸邪之在於心者，皆在於心之包絡。」